

スポーツ活動が人格形成に与える影響

～スポーツ界の実態の考察を通して～

The Influence of Sports on Personality Development

1K03B163-9 藤井 はな

指導教員 主査 リー・トンプソン先生 副査 太田 章先生

1、研究の動機、目的、方法

「スポーツ」と聞いて一般的にイメージされることは、「爽やか」「正々堂々」「夢」などプラスの印象がほとんどである。社会にとってスポーツ選手はヒーロー・ヒロインとして認められることが多く、国際的スポーツの大会は国民を団結させる力まで持つという。さらに、プロのスポーツ選手だけではなく学生スポーツに対する一般的な捉え方は、「青春」「健全」などそれを賞賛する見方がごく一般的である。

しかし、近年スポーツ界をめぐる暴力事件や集団レイプ事件が多発し、社会的にも注目されるようになってきている。大学スポーツでいえば、帝京大学ラグビー部（1997年）国士舘大学サッカー部（2004年）の集団レイプ事件、京都大学アメリカンフットボール部の集団強姦事件（2006年）、高校スポーツでいえば、明德義塾高校や駒大苫小牧高校野球部の暴力事件（2005年）、中学校以下の部活動やスポーツ活動をめぐっても顧問から子供への暴力事件が後を絶たない。

このような事件が発生し露呈していく中で、筆者は、スポーツの実態は「爽やか」で「健全」という一般的イメージとは全くかけ離れたものなのではないか、と思い当たるに至った。同時にスポーツ選手達自体にもまた、暴力事件等を起こしてしまう原因となる性質があるのではないかと予想した。これを踏まえて、人が人格形成の時期をスポーツに没頭するとき、スポーツがどのような影響を人の人格に与えていくのか、ということに筆者は強く関心を抱いた。そこでこの論文では、まずスポーツをめぐる事件が発生する背景とスポーツの本質の關係の考察から始める（第一章）。そして、現在の学生スポーツ界の実態の考察を通して、スポーツが人格形成に与える影響を考え（第二・三章）、最終的にプロスポーツ選手の社会的役割や責任、あるべき姿を見出す（第四章）。

2、各章の要約

《第一章》近年発生している学生部活動の暴力事件についての考察を行う。事件が発生する背景・原因として、「スポーツが本来持つ性質」と「部活動を取りまく環境」の2点を挙げる。第一章では「スポーツが本来持つ性質」に関して取り上げ、スポーツの起源や本来スポーツが持っている性質「暴力性・野蛮さ」や「戦いの場」としての非日

常・非社会的な特徴に触れ、これらの価値観がスポーツ選手と事件を結ぶ一つの理由ではないかという考察をする。スポーツの持つ本来の性質が、スポーツ選手の価値観や考え方に影響を与え、スポーツ選手にも「暴力性と野蛮さ」を付与している可能性について論じる。この章の第四節では、まとめとしてスポーツの本質とそれが人格形成に与える影響について、スポーツ心理学研究結果を用いて考察する。

《第二章》暴力事件の発生するもう一つの背景と考えられる「部活動を取りまく環境」について、その実態をより詳しく考察する。現在の部活動における特殊な人間関係や上下関係、スポーツだけやっておけば良いとされる環境などが、学生スポーツ選手が事件を起こす原因になっている可能性があるという視点で考察する。また、事件を起こした少数の部活だけにそういった環境があるのではなく、日本のあらゆる部活動に歴史的に長く浸透し存在してきた部活動の特殊な環境や価値観を考察する。この章の第五節では、まとめとして部活動と人格形成、また部活動の理想的なあり方について考察していく。

《第三章》第二章で述べてきた部活動の中でも特に大学生の部活動に焦点をあてる。筆者自身が4年間スポーツ科学部に身を置き身近に感じてきたことを例に挙げ、大学部活動生の実際の生活環境や人格とのかかわりを考察していく。第一節では、大学生の部活動学生が、生活のほとんど100パーセントを部活動に捧げていることへの懸念事項を述べる。第二節では、大学の部活動学生達の就職事情や将来の考え方について、第三節はマスメディアに注目された大学アスリート達の価値観の変化とその問題点について考察する。

《第四章》プロスポーツ選手の持つ役割と責任について考察する。スポーツによって人格の大部分を形成してきたと思われるプロスポーツ選手の、社会に対する役割と責任を考察する。その際有効な手段であるマスメディア露出についても言及し、プロスポーツ選手が社会とどのように向き合っていくべきか、その理想的な姿勢を考える。

《終章》最初に全体を通して自分自身がこの論文のテーマに行き着くまでの経緯と感想を述べ、次に第一章から第四章までのまとめを論じる。